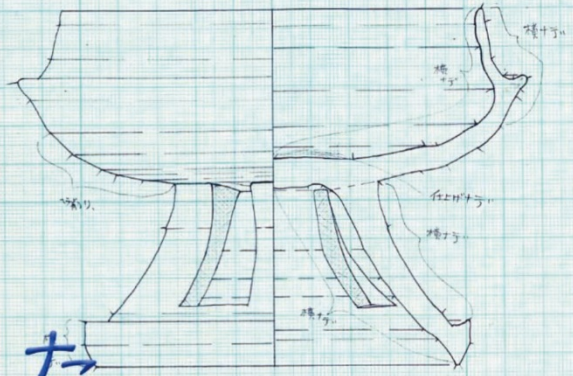
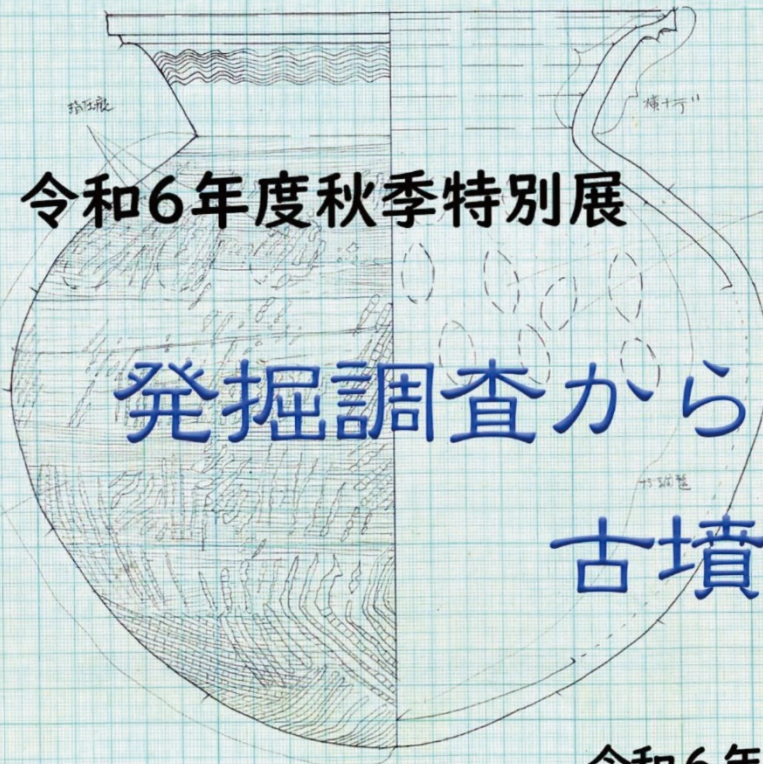


令和6年度秋季特別展

発掘調査からみた

古墳時代の情景

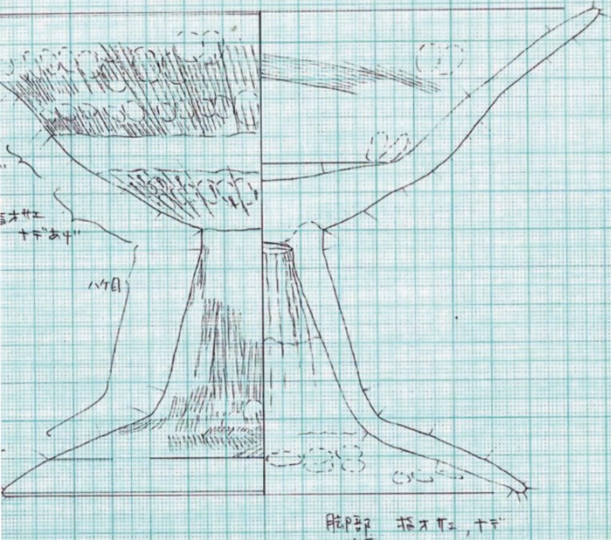
令和6年10月5日(土)~12月15日(日)



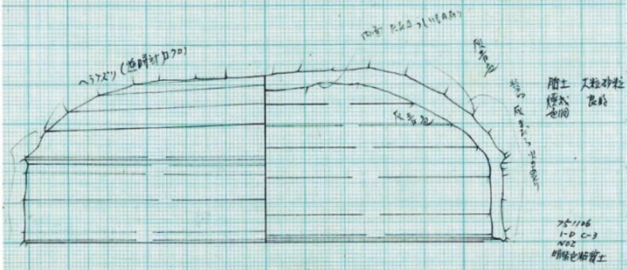
MH
761017
沼(38E)
No.1
色調 陶灰青色(例) 淡灰色
胎土 良好(微塵少含)
焼成 堅緻

MH
751275
ZC区
色調-灰色(断面-淡紅色)
胎土-良好
焼成-堅緻

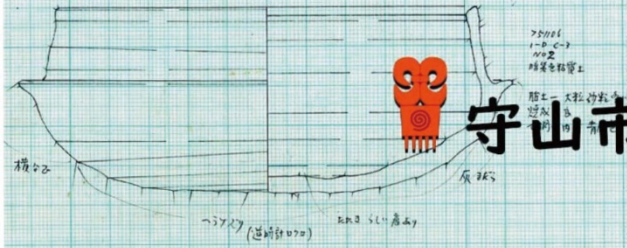
内面
| 横打
| 十
| ハヤ目



胎土 横打, 十



胎土 良好
焼成 堅緻
751116
11-2 C-3
明確な胎土



胎土 良好
焼成 堅緻
751116
11-2 C-3
明確な胎土



守山市立埋蔵文化財センター

MH4-3

はじめに

3世紀半ばから7世紀の日本列島では、彼方此方で前方後円墳に代表される古墳築造の槌音が響いていました。一説では、その数は全国のコンビニエンスストアの3倍余の16万基とされています。

古墳は首長が葬られた巨大な墓で、支配下の民衆がその築造に従事しました。このことから人々の間の格差が拡大し、支配者である首長と被支配者層の民衆という階級社会であったことがうかがえます。古墳は、そのことを如実に物語る象徴的なモニュメントであることから、この時代を古墳時代と呼んでいます。

今回の特別展は、「発掘調査が語る古墳時代の情景」をテーマに、弥生時代が過ぎ去った後の守山の動態を知っていただくために開催するものです。古墳時代の守山では、生産性の高い沖積平野に尚一層の集落が営まれます。須恵器やカマドなどによる新たな食文化や馬匹文化など、先進の渡来文化がもたらされたことによって、人々の生活様式が大きく変わったことをお分かりいただければ、展示会を準備した一同、大変うれしく思います。

なお、本紙は展示解説の一助として作成したのですが、必ずしも展示に沿った記載内容でないことをご了承ください。

令和6(2024)年10月5日

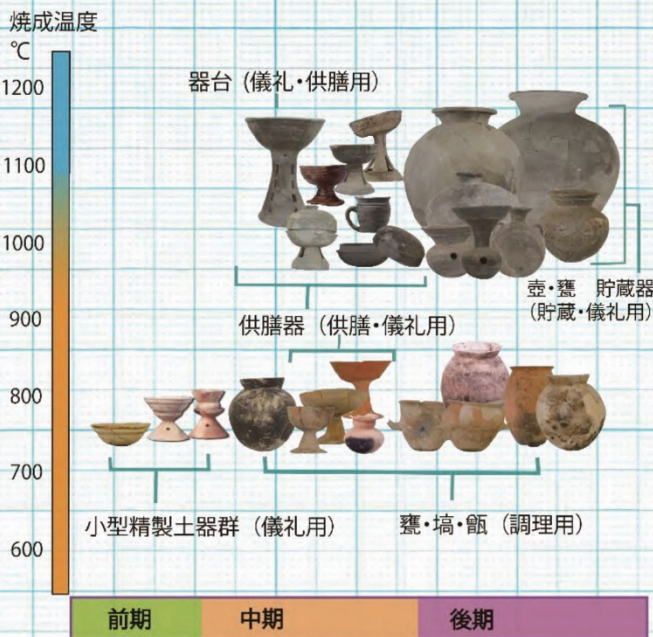
Left Side 土師器と須恵器

古墳時代とは、

まず、今回の特別展のテーマである古墳時代とは、弥生時代に続く時代区分で、定型化した前方後円墳の出現期から古墳が築造され続けた7世紀代までという実年代が定説化しています。

しかし、その始まりの指標となる前方後円墳については、箸墓古墳か、それともそれに遡る纏向古墳群か、意見の分かれるところで、そのどちらかで、3世紀前葉、あるいは中葉と古墳時代の幕開けの議論を生んでいます。

土師器



古墳時代の土師器・須恵器の器種構成

弥生時代～古墳時代の土器編年案 (寺澤薫氏作成案を改編)

実年代	時代	時期	新しい近畿編年	従来の近畿編年	東アジアの情勢	
100 B.C 0 A.D	弥生時代	中期	[Ⅱ] 1	第二様式	前108 衛氏朝鮮、武帝の攻撃で滅ぶ 4郡設置 前82 4郡のうち楽浪郡だけ残る 前37頃 高句麗建国 前1頃 倭人、百余国に分かれ、1部は楽浪郡に朝貢	
			[Ⅱ] 2			
		[Ⅲ] 1	第三様式			
		[Ⅲ] 2				
	前期	[Ⅳ] 1	第四様式	25 後漢成立 57 倭の奴国王、後漢に朝貢、光武帝から印綬授かる		
		[Ⅳ] 2				
	100 200 300 400	古墳時代	後期	[Ⅴ] 0	第五様式	107 倭国王、後漢に朝貢、生口献上 馬韓、弁韓、辰韓の三韓時代
				[Ⅴ] 1		
			[Ⅵ] 1	(壺式)	184頃 倭国乱れ、互いに攻め合う	
			[Ⅵ] 2			
前期		[Ⅶ] 0	庄内式	220~222 魏、蜀、呉が成立(三国時代) 239 女王卑弥呼、難升米らを帯方郡へ派遣、『魏倭王』の印綬を受ける 248 卑弥呼没 265 西晋成立		
		[Ⅶ] 1				
古墳時代		前期	布留Ⅰ式 1	布留式	304 五胡十六国(華北)游牧民族が林立 313 高句麗、楽浪郡滅ぼす 317 東晋建国 346~356 百濟、新羅建国 (三国時代)	
			布留Ⅰ式 2			
		布留Ⅱ式 3	391 倭軍、百濟、新羅と戦う 399 百濟、倭国と連合し、新羅を攻める			
		布留Ⅱ式 4				

古墳時代初頭は、弥生土器の系譜をひく土師器が使われますが、中期からは須恵器が併用されるようになります。律令時代の『延喜式』で、土師器を「はじのうつわもの」、須恵器(陶器)を「すえもの」と呼んでいたことがその名の由来になっています。

土師器と弥生土器の間には、製作技法の上で差異が認められる器種もあれば、漸移的な器種もあります。使われた時代が弥生時代であれば弥生土器、古墳時代であれば土師器と呼んでいます。

古墳時代初頭の土師器は、弥生土器から受け継いだ地域独自の形態や装飾を継承していました。しかし、ヤマト王権が版図を広げ、権威が及ぶようになると、例えば布留式土器などの畿内通有の土器が各地域の在来土器に取って代わり、土器の地域色は失われます。

須恵器

吉身北・南遺跡などの古墳時代後期集落では、土師器とともに須恵器が使われ始めたことがわかります。

須恵器はロクロで成形し窯で焼き上げるため、堅く焼きしまり水漏れしにくいのですが、直接、火にかけると割れやすい欠点があります。従来の土師器は野焼きによって比較的手軽に生産できますが、水漏れや汚れやすい欠点があります。そのため、煮炊きに使う甕、盛りつけ用の坏や高坏は従来からの



吉身北遺跡出土の土師器・須恵器（古墳時代後期）

土師器が使われ、液体を貯える容器としての壺、汁気の多い食材の盛り付ける坏などは須恵器が採用され、それぞれの長短所を考え、用途に応じて使い分けられるようになります。

守山で古墳時代後期に普及した須恵器は、渡来文化のひとつで、朝鮮半島で使われていた韓式系土器のうちの陶質土器を手本に国産化された土器です。

朝鮮半島南部地域（百済、新羅、伽耶）から日本に移り住んだ渡来人技術者の主導によって須恵器生産が始まりました。



古墳時代後期の土師器・須恵器

韓式系土器・カマド調理

播磨田東遺跡や阿比留遺跡、下長遺跡などでは、朝鮮半島で使われていた韓式系土器や、それと判別が難しい生産当初の初期須恵器が出土していて、守山にも渡来人が居住していたことを物語っています。



古墳時代中期の韓式系土器・初期須恵器

吉身北・南遺跡の集落では、食に関

するもう一つの渡来文化であるカマドが導入されていたことがわかりました。それまでは、住居中央の炉が調理も担っていましたが、カマドが住居の東～南辺の壁際に造りつけられたため、住居内の空間利用も大きく変化したものと想像できます。その後の調査で、市内の古墳時代後期の集落は、普遍的にカマドが波及していることが明らかになっています。

カマドによって、「煮る」調理に「蒸す」が加わりました。そして、土師器に新たな器種を誕生させます。米を蒸し上げるのに十分な水量が入る長胴甕や底部に穴をあけて蒸気を通す甑、あるいは把手のついた鍋などです。カマドで火を焚き、長胴甕の沸かした湯を甑に通して食材を蒸し上げます。古墳時代後期以降、米は蒸して食するようになり、現在の炊飯になるのは江戸時代以降のこととされています。



古墳時代の朝鮮半島

カマドに特化した長胴甕や甑、鍋は、故地である朝鮮半島では、土師器に似た軟質土器の器種です。

日本では、韓式系土器のうち、陶質土器を須恵器に、カマド調理に不可欠な軟質土器の器種を土師器に置き換え、古墳時代の食文化の道具として土器文化として昇華していきます。



左・甑 中・移動式カマドと甕、甑 右・カマドでの調理模式

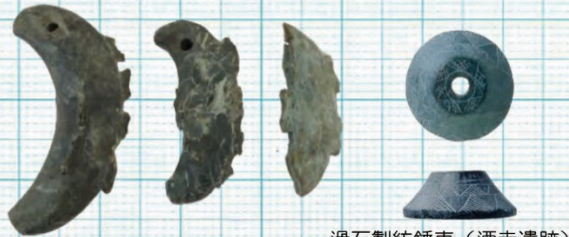
Centre ヤマト王権下のまつり、手工業生産

古墳時代の玉づくり

守山市内の遺跡では、古墳時代中後期にあたる5世紀～6世紀中頃まで玉づくりが行われていました。中期の播磨田東遺跡や堂ノ北原遺跡で見つかった玉づくり工房跡では、勾玉などの玉類の他、有孔円板などの滑石製模造品もつくられていて、古墳時代中期の玉づくり遺跡の一般的な生産パターンといえます。後期になると、小規模ながら遺跡数は格段に多くなり、より多くの集落で滑石を材料にした玉づくり生産が行われています。



播磨田東遺跡出土の滑石製模造品・勾玉



滑石製子持ち勾玉

(左・吉身南遺跡 中・欲賀西遺跡 右・四反田遺跡)

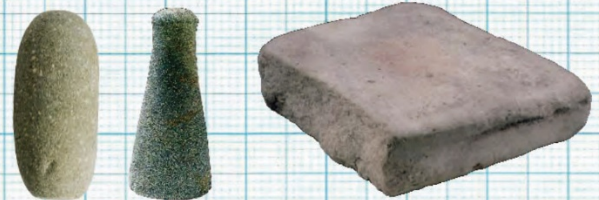
滑石製紡錘車(酒寺遺跡)

野洲川流域の玉づくりは、日本各地の玉の石材や滑石を琵琶湖の湖上交通によって入手することができる、地の利を活かした手工業生産であったでしょう。

この時代の集落からは、数多くの滑石製紡錘車、希少な出土にとどまる子持ち勾玉も出土しています。紡錘車は滑石製模造品に付随することや鋸歯文などが線刻されていて、祭祀品とされています。

石杵・石臼

播磨田東遺跡からは水銀朱が付着した古墳時代中期の石杵が、金森東遺跡でも朱の付着した弥生時代終末から古墳時代初頭の石臼が出土しています。出土した石杵や石臼は、朱を精製するための道具と考えられます。



石杵(左・播磨田東遺跡 右・下長遺跡) 石臼(金森東遺跡)

朱は神仙思想に伴って日本列島にもたらされたと考えられ

ていますが、古墳時代には、古墳の石室の壁面や棺などに朱が多用されているように、赤い色は辟邪、魔除けの効果があると信じられていました。集落内でも悪霊邪気払いに使われた、あるいは不老不死の仙薬とされたのかもしれない。



左・塚之越遺跡出土の鉄斧 右・鉄斧が出土した古墳

鉄器の充足

塚之越遺跡では、古墳時代前期の方墳から鉄斧3点が出土しました。金森東遺跡では、方形周溝墓から短剣、土壙墓から鉄刀が出土しています。時期は明確ではありませんが、古墳時代前期に遡る可能性もあります。欲賀南遺跡の調査でも古墳時代後期と考えられる土壙墓から鉄刀が出土しています。

古墳時代には、日常生活に鉄器が普及し始めますが、前期の鋤や鍬は依然、堅木のカシでつくられていて、鉄製の鋤先が装着されるのは、後期を待たなければなりません。

欲賀南遺跡や焰魔堂遺跡では、木製の鋤身に嵌め込むU字状の鉄製鋤先が出土しました。

鉄製品は依然として希少品であるため、鉄製の武器・武具は権威を象徴し続けたのです。古墳の副葬品に見合う貴重品であったと考えることができます。



金森東遺跡短剣出土状況



金森東遺跡長刀出土状況



同上



欲賀南遺跡鉄刀出土状況



焰魔堂遺跡出土鋤先

欲賀南遺跡出土鋤先

U字状鋤先の装着

威儀具

下長遺跡をはじめとする集落からは、首長自らが所持したり、あるいは祭祀の執行に使ったりしたことによって、民衆を統率する役割を果たした威儀具が出土しています。

下長遺跡からは、杖頭に弧帯文が象られた儀杖や直弧文が装飾された刀の柄頭、団扇状木製品、石釧などが、八ノ坪遺跡でも衣笠の立飾りが出土するなど、枚挙にいとまがありません。

このような品々は弥生時代には稀有で、ヤマト王権と密接な関係をもった権力者の存在を投影しています。弥生時代後期の伊勢遺跡に出現した大型建物の時代から古墳時代前期に前方後円墳が出現するまでの間に、王や地方の首長の権力が飛躍的に強大化したことを想像することができます。

儀杖型木製品

服部遺跡の古墳群からは琴をはじめ、古墳に立ち並んでいた儀杖型木製品、埴輪の他にも、被葬者への供献品や葬送、首長権継承に伴う共飲共食儀礼の儀器として使われた土器が出土しています。古墳の周濠から出土した木製容器に納められた須恵器蓋坏も死者に捧げられた食物容器と考えられますが、播磨田東遺跡や酒寺遺跡でも同じような須恵器蓋坏が出土していて、定型化した儀礼であると想像できます。



Front 建築部材・木器



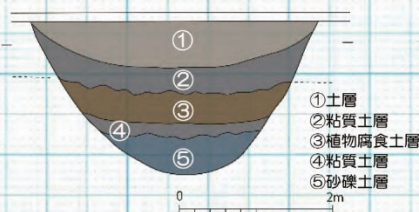
下長遺跡の旧河道出土の建築部材・木製品

出土した建築部材や木製品には、丁寧に穿たれた柄穴などやの加工痕と粗雑感のある穿孔など、数次の加工痕が認められるものも多く見られ、建築部材や大型の木製品を加工して再利用していたことがわかります。

木製品や建築部材などの木質遺物は腐食しやすいことに加え、例えば、建築材が井戸枠などにリサイクルされたり、最後には燃料にされたりと、石器や土器に比べて残りにくい特性があります。

しかし、下長遺跡では、河幅18m、深さが2m以上もある旧河道から日常品の他に、長尺の柱などの建築部材が良好な保存状態で出土しています。

木製品や建築部材は粘質土と植物腐植土が交互に堆積する土層から見つかります。断面模式図のように地表下1mの深さに堆積する植物腐植土層は保水性に優れ、腐植土層と交互に堆積する粘質土層が水分や空気を遮断する状態が木器、木製品や有機質の保存に適していたようです。



下長遺跡の旧河道断面模式図



旧河道検出写真

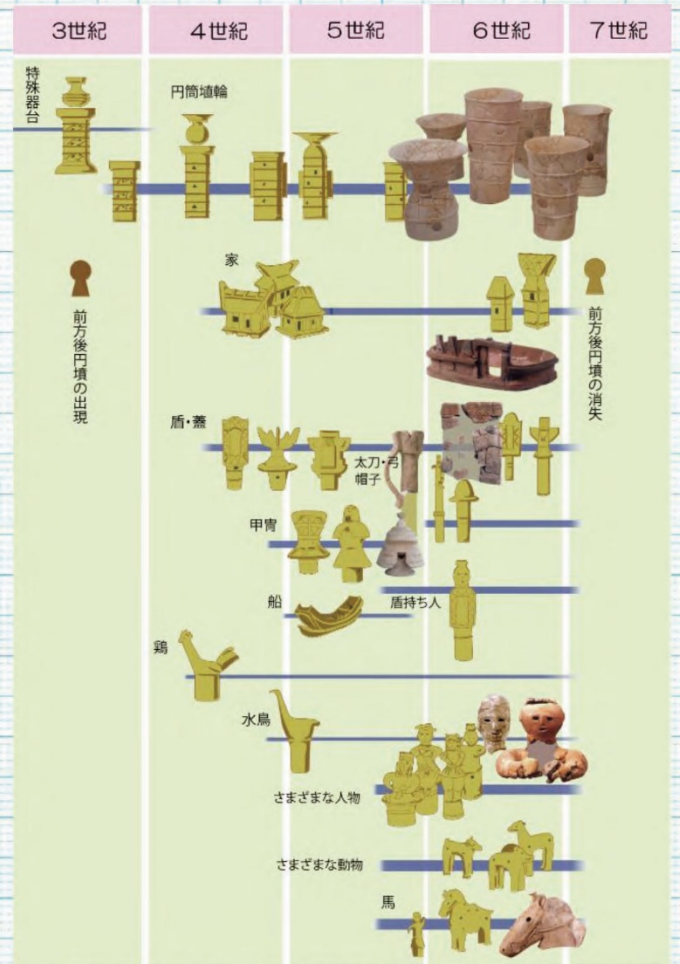
古墳に並び立てられた埴輪は、3世紀後半に吉備地方の特殊器台・特殊壺をもとに円筒埴輪などが誕生し、4世紀には家形や器財形、動物埴輪が、5世紀になると、人物や馬形埴輪が最終段階に登場し、6世紀代まで古墳になくはならないものとして墳丘に並び立てられます。

各種形象埴輪は、被葬者の死後の扱代である家形埴輪、ステータスを示す器財形埴輪、武具形埴輪は悪霊や災いを祓うアイテムで、縦横列に並び立つ人物埴輪や一部の動物埴輪は古墳で執り行われた葬送儀礼を表現しているとする説などがあります。

発掘された古墳からも多様な埴輪が見つかっています。川田遺跡の発掘調査では、全長20m足らずの前方後円墳の周濠から、人物埴輪や円筒埴輪、朝顔形埴輪とともに馬形埴輪が出土しました。

頭部と胴部の一部が復元でき、引手金具がつく素環鏡板付轡や手綱、面繫をつなぐ有脚伏鉢形辻金具、鞍が表現されている秀逸な埴輪といえます。

酒寺遺跡では、古墳の周濠から盾形埴輪、円筒埴輪とともに罌形埴輪が出土しました。罌形埴輪は、水のまじりの祭祀場とされる導水施設、あるいは井戸を覆う建物を写し取った家形埴輪を罌うもので、家形埴輪とセットで4世紀



「導水施設と埴輪群像から見てくるもの」
(2010 安土城考古博物館)を参考に作成

後半に出現します。導水施設で執行される儀式を遮蔽する、あるいは井戸の湧水の清浄を守る機能とする説があります。

浮気町地先の松塚遺跡の発掘調査では、古墳の周濠から甲冑形埴輪や大刀形埴輪、円筒埴輪、馬形埴輪が出土しました。古墳の規模や墳形は解明できませんが、出土埴輪から5世紀後半に築造されたものと考えられています。

甲冑形埴輪は、眉庇付冑と呼ばれる冑を象っています。大刀形埴輪は、鹿角で作られた大刀の装具を象った埴輪で、全国的にも最古級に位置づけられます。

松塚遺跡の古墳は、調査地に程近い栗東市側の亀



罌形埴輪（酒寺遺跡）

左・大刀形埴輪
右・甲冑形埴輪（松塚遺跡）

馬形埴輪（川田遺跡）

巫女形埴輪（欲賀南遺跡）

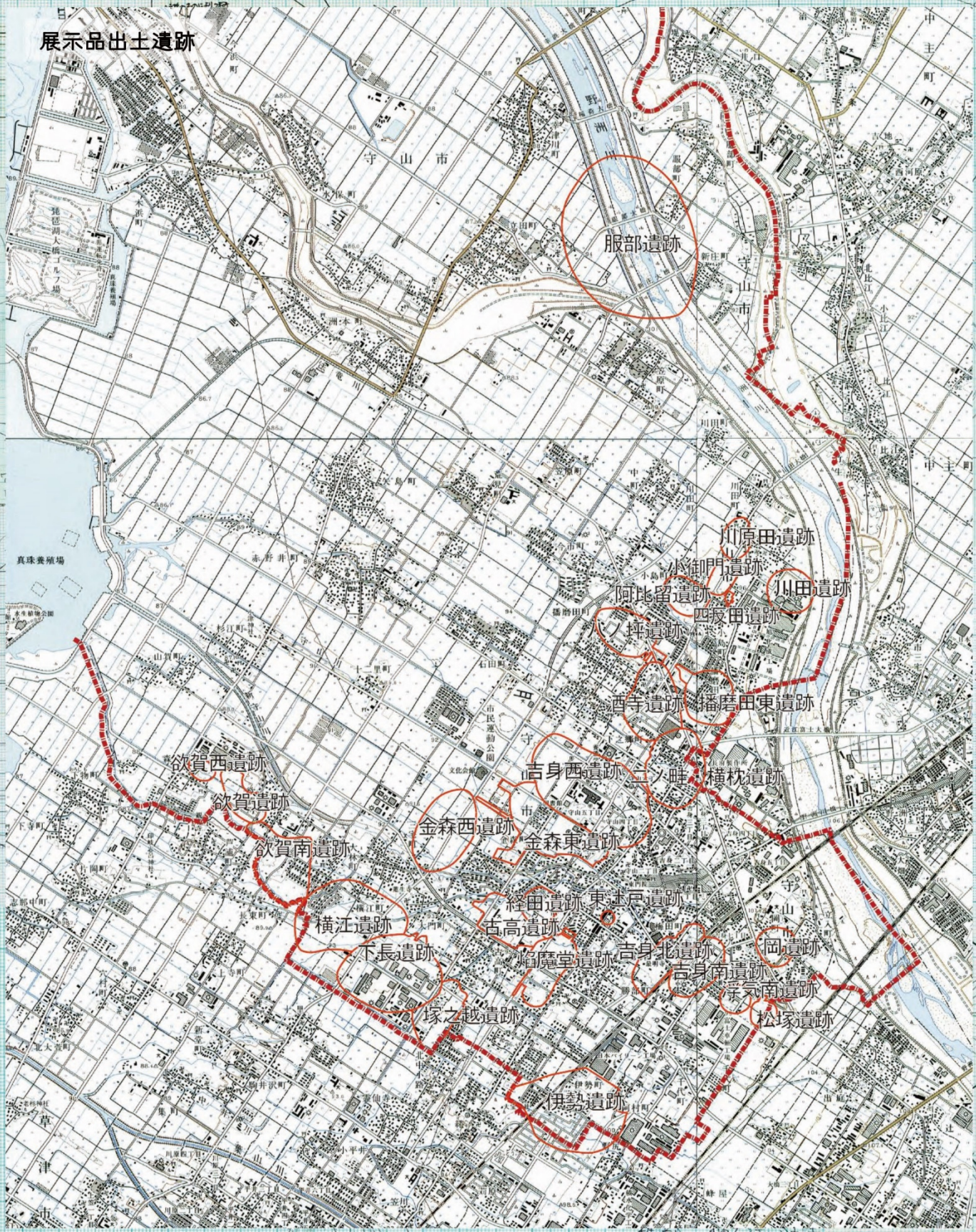
塚古墳をはじめとする古墳群に包括されます。出土した埴輪は、ヤマト王権中枢の埴輪工人か、その影響を受けた地域の工人がその製作にあたったのでしょうか。

欲賀南遺跡では、3基の古墳のうちの1基から巫女形埴輪が出土しています。頭と両腕、胴の一部しか残っていませんが、顔は丸みをおび、髪は島田髷を結っています。首には玉飾りが表現されていて、両腕は前に差し出し、手には捧げものを持っているようにも思われます。胴部の背中には帯が表現されていて、「意須比」という巫女形埴輪独特の衣装を表現しています。



服部遺跡で検出された導水施設

展示品出土遺跡



守山市立埋蔵文化財センター

〒524-0212 守山市服部町 2250 番地

TEL&Fax 077 (585) 4397

mail : maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

開館時間：午前9時から午後4時まで

休館日：火曜日・祝日の翌日・年末年始

入館料：無料

HP <http://moriyama-bunkazai.org/center/>